

時評

愛見山 豊

それから時間が経過して、オランダのバロック絵画の巨匠・レンブラントは、決まらぬほどの多いルネサンス期の肖像画に、ある工夫を

展覧会の出品作ではない)でローンバーやバートシエンナなど同色系が使われていて、不安そうに手を組みながら立つ中島の視線

照された養育は不支給に おびえているのに対して、カミヤウ糸のレッドオニシは、その横で羨まかな

中島の巨画像が衣服を脱いだのは、中島がそれまで時代の人間の存在と向き合い、真摯に描き続けてきたからで、次の展覧会

新刊紹介

伝統や歴史が

作家の最新作。

主人公は豊に暮らす中学生の少女。豊。この豊はかつて「山のおん」「海のおん」で分断されていた

信じていた伝統や歴史がすべてを奪ったとしたら、何かを信じるとはどういふことなのか。

大人になつて誰か巨に

◆第53回沖繩旺文会展覧会 (那覇市民センター1階) 日まで) 沖繩旺文会(砂川豊光会長)の53回目の展覧会に、9人の会員がアクリル、油彩、コラージュなど多彩な手法で描いた作品を展示。キャッチアップの「つづのバツション」は、ひげの「作品展だ、沖繩旺文会主催展覧会」



ギヤ

◆第1、第2回

ゆるやかな放散を生み出す。下へ真つ直ぐ響く。冷たくも暖かくもな。アンバーの中にアツク。て。とも透明にハツキ。向うには何もな

抗

コーヒーを飲



「桜を見る会」の中止発表について、記者団に話す安倍首相(11月、首相官邸)

文化

この連載は毎週12年140回になる。この間、年末に回顧をしたことがなかったが、今年はしなくてはならない切迫感にかられる。それほどまでに「自由」や「ジャーナリズム」が確実として連続的に、しかも軽やかに弱められていると考えるからだ。順位付けには意味がないが、まず十二ユーエ風は項目を挙げ、テーマ別に課題を考えたい。

- ・桜を見る会でも公文書軽視なお一團明らかに
- ・あいちトリエンナーレで芸術の自由揺らぐ
- ・高邸記者会員で菅野の壁厚く
- ・川崎でペイトス1手に刑事罰
- ・京都アニメーション事件で被害者実名報道撤回なし
- ・ドローン禁止法改正で事

2019年12月は特定秘密保護法施行5年の区切りの年だ。法規定上、見直しが行われているが、現在予定されているのは対象機関の大幅削減程度である。これは、立法時の検討がいかに不十分であったかの証左をなす方が多い。対象機関を絞り込んで善晴らしのい、のではなく、その程度のいい加減な検討しかしなかつた法は、抜本的な見直し

実上取材制限

- ・天皇代替わりで祝賀報道続く
- ・N国党議席獲得など公共メデアの存在揺らぐ
- ・相次ぐ大規模自然災害で情報空白問題に
- ・コンビニエンスストアから成人雑誌は消滅

政治とメデア

メデア時評

山田 健太

(12月)

しが求められている」と考えるべきだ。そしてどちらの5年間も、不幸にも情報公開のバツクニツシエ期間でもある。

自衛隊南スーダン日報問題に始まり、森友・加計学園、そして今回の桜を見る会に至る、公文書の改竄・破壊・隠蔽は、国家運営の基本を完全に崩壊させる事態である。しかも真相の意向を動かし、首相総裁がりで証拠の隠滅を謀るさま

もつになり、予定調和が崩れているようにも見える。しかしそれ以前は、本来は互いに主権しているはずの意見は完全に官邸に主導権を握られていたし、さらには「官邸」による記者クラブ(大手報道機関の常駐記者の集まり)が官邸と一体になって異分子を排除する空気を醸成したことも伝えられている。それが、自らに官邸から記者クラブへの申入書が公表された

当該記者への期待に反比例するものが、「その他記者」に対する失望や怒りが高まっているともいえる。これはまさに、権力監視というジャーナリズムの重要な役割に対する信頼感の失墜であって、極めて重大な事項だ。

さらにいえば、あいちトリエンナーレの開催に関する事件も政治との関係で語ることもできよう。とりわけ助成カットの問題は、国や自治体が表現内容に対し、何の遠慮もなく正面から介入してきた事例だ。しかもこうした状況に報道界は

市民とメデア

一方で市民との関係も揺れている。京二事件での被害者実名報道には、報道界に厳しい批判が寄せられた。その前の体線としては、東京・池袋で発生した高邸者の運転する自動車暴走事故に際し、特別扱いをしているかに映った加害者に対して「上級国民」とシッパルが貼られ、あわせて新聞等が擁護しているとのネット世論が巻き起こった。京二では、電子版に関しては最初から豊平、あるいは48時前後に匿名化など、新聞各社もこれまで以上の配慮を示したものの、そうした個別対応は納得を得られるレベルを超えたといふこと

士に懸念するの象徴が天皇・皇室報道で、30年前の昭和天皇死生時の報道に比べ、いまはむしろこのことで済ませることもなく、憲法制度としての天皇がどうあるべきかは、他の憲法上の制度(例えば自衛隊)と同様、徹しい議論を積み重ねる必要がある。もちろん、その役割はメデアにあるわけだ。

一方で市民との関係も揺れている。京二事件での被害者実名報道には、報道界に厳しい批判が寄せられた。その前の体線としては、東京・池袋で発生した高邸者の運転する自動車暴走事故に際し、特別扱いをしているかに映った加害者に対して「上級国民」とシッパルが貼られ、あわせて新聞等が擁護しているとのネット世論が巻き起こった。京二では、電子版に関しては最初から豊平、あるいは48時前後に匿名化など、新聞各社もこれまで以上の配慮を示したものの、そうした個別対応は納得を得られるレベルを超えたといふこと

だ。その前の体線としては、東京・池袋で発生した高邸者の運転する自動車暴走事故に際し、特別扱いをしているかに映った加害者に対して「上級国民」とシッパルが貼られ、あわせて新聞等が擁護しているとのネット世論が巻き起こった。京二では、電子版に関しては最初から豊平、あるいは48時前後に匿名化など、新聞各社もこれまで以上の配慮を示したものの、そうした個別対応は納得を得られるレベルを超えたといふこと

作家の最新作。主人公は豊に暮らす中学生の少女。豊。この豊はかつて「山のおん」「海のおん」で分断されていた

弱まるジャーナリズム

表現の自由 報道が議論の場奪う例も

とを機に、世の中は動き始めたといふことも多い。

期待と失望

たとえば、その高邸記者等のメデア報道が一矢を報いてきたが、今回の櫻見会では現段階まで、週刊文庫がわずかに新証拠を提示する以外、メデア界の情報はなにもいい寂しい状況だ。さすがに報道界側も、こうした危機感はあるのか当該事件が表面化して以降、豊長豊記者会員も厳しい質問が飛ぶ

二分され、国益に反するものは芸術には助成する必要はないといった言動がなされた。まさに文化行政においては内容審査があつて当然という論理である。これまで日本はメデアに対して財政的にも手厚い助成を行ってきたわけだが、その最も恩恵を受けてきた新聞劇場では終演後に拍手が起きるほどの盛り上がりだ。これは、官邸の理不尽さに対する共感が社会に広がっていることの表れだろう。一方で報道界に対しては、

たその前の体線としては、東京・池袋で発生した高邸者の運転する自動車暴走事故に際し、特別扱いをしているかに映った加害者に対して「上級国民」とシッパルが貼られ、あわせて新聞等が擁護しているとのネット世論が巻き起こった。京二では、電子版に関しては最初から豊平、あるいは48時前後に匿名化など、新聞各社もこれまで以上の配慮を示したものの、そうした個別対応は納得を得られるレベルを超えたといふこと

たその前の体線としては、東京・池袋で発生した高邸者の運転する自動車暴走事故に際し、特別扱いをしているかに映った加害者に対して「上級国民」とシッパルが貼られ、あわせて新聞等が擁護しているとのネット世論が巻き起こった。京二では、電子版に関しては最初から豊平、あるいは48時前後に匿名化など、新聞各社もこれまで以上の配慮を示したものの、そうした個別対応は納得を得られるレベルを超えたといふこと

作家の最新作。主人公は豊に暮らす中学生の少女。豊。この豊はかつて「山のおん」「海のおん」で分断されていた

(専修大学教授・言論法) (第2土曜掲載)